

11/14(木)・15(金)の2日間、第69回日本生殖医学会学術講演会が名古屋で開催されました。院長を始め副院長、看護師そして培養士が参加しました。

今回の学会は『不育症から学ぶ』がテーマでした。

不育症とは、流産あるいは死産が2回以上ある状態です。妊娠経験者の5%と高頻度でありながら診察できる医療従事者が少ないことに加えて、一般的に認知度が低いことも課題もあるとのことでした。流産と聞けば、胎児の染色体異常性、母体の抗リン脂質抗体症候群、そしてカップルの染色体転座など様々な原因があります。その原因を知り、きちんとした知識を持って対応することの大切さを学びました。

また、反復流産、散発流産ともに最も多い原因は胎児染色体異常性であるが、日本は着床前染色体異常性検査に対し、胚(生まれてくる胎児)への尊厳から慎重な態度をとっています。ARTの保険化された今、生殖医療分野についてもっと議論が進み、安心して治療ができるようになることを期待したいと思いました。

培養士分野では、AIの胚評価、胚の凍結基準そして新しい凍結・融解方法など学ぶことができました。

今回、培養室からは、当院で使用しているタイムラプスシステム搭載型培養器(iBIS)の自動評価機能の有用性をポスター発表にて報告しました。

#### 『iBISの自動評価機能の有用性の検討』

当院では、保険適応が始まった2024年より全症例に対しiBISで培養をしており、iBISでの培養で得られるタイムラプス画像を培養士が解析し、移植胚の選択を行っています。

iBISには、初期胚の胚盤胞到達性予測スコアと胚盤胞の評価をする2つの自動評価機能があるため、今回、この2つの自動評価機能の有用性の有無を検討しました。